

 書評

加藤忠史 著

《脳科学ライブラリー 1》脳と精神疾患

刃刀 浩

加藤忠史先生が単独で執筆された著書は、本書を含め 5 冊になる。「双極性障害—躁うつ病の分子病理と治療戦略」(医学書院, 1997 年)は、加藤先生の研究対象疾患について臨床から研究まで網羅した名著であり、本書評欄でも拙文を掲載していただいた。双極性障害の著作にはほかに「躁うつ病とつきあう」(日本評論社, 1997 年, 2008 年改訂第二版)と最近の「双極性障害—躁うつ病への対処と治療」(ちくま新書, 2009 年)が出版されている。「こころだって、からだです」(日本評論社, 2006 年)は、最先端の脳科学的研究成果も盛り込みつつ、精神疾患全般についてわかりやすく書かれた啓蒙書である。今回の「脳と精神疾患」は、全 7 巻の脳科学ライブラリー(津本忠治 編集)の第 1 巻であり、より専門的な内容となっている。

本書は、精神疾患の脳科学的進歩について、簡にして要を得た解説書である。全体で 214 頁とコンパクトであるが引用文献は 550 件に上り、いずれの文献も精神医学研究のマイルストーンとなるような選りすぐりのものだ。膨大な研究成果をよくここまで要領良くまとめたものだと脱帽するほかはない。日本人研究者による研究成果の紹介も多く、わが国の研究について知るのにも役立つ。対象疾患は統合失調症、うつ病、双極性障害、自閉症、AD/HD、不安障害、身体表現性障害と、主要な精神疾患を網羅している。最後に動物モデルについて概説した 1 章があり、精神疾患を動物で研究することの現状と問題点についての完璧な総説となっている。

それぞれの疾患概念についてまず歴史的経緯(原典)から解き明かし、臨床症状と治療法についても概説してある。脳科学的研究については、遺伝子、画像、死後脳から動物モデルまでカバーしてあり、

全体が有機的なつながりをもって語られる。研究結果を筆者なりに解釈して考えを展開するというより、きわめて冷静かつ公平に研究成果を紹介している。しかし、各章の最後に、現時点の脳科学的研究成果を総合的にみて、最もあり得そうなストーリーを提示してくれる。たとえば、ストレスによって前頭葉や海馬の萎縮やスパインの減少が生じる一方、扁桃体ではスパインの増加が生じてその神経回路が優勢になることが、うつ病の脳基盤となっているのではないかという。双極性障害では、「ドーパミンの増減が躁状態・うつ状態を引き起こすことについては多くの証拠があり、確からしい」とし、「神経細胞レベルでの細胞ストレスに対する脆弱性を伴う疾患と考えると納得がいく」とまとめている。

しかし、精神疾患を脳科学で解明するには自ずと限界もある。筆者はその点も包み隠さず明らかにしている。人間は単純でわかりやすいことを好む性質があるが、本書は精神疾患の複雑さと曖昧さを嘘や偽りなく伝えている。たとえば、パーキンソン病のような神経疾患は、黒質—線条体系のドーパミン系の変性で 100% 説明がつくが、精神疾患ではそのような単純明快な図式は期待できそうにない。むしろ、そうだからこそ、精神疾患であるといえるのかもしれない。脳科学は精神疾患を少しずつ部分的に明らかにしてくれているが、なかなか全体像をみせてくれない。その謎解きに挑戦したいという輩にとって、本書は必読書であり、座右の書となるだろう。

(国立精神・神経センター 疾病研究第三部)

●A5 224 頁 2009 定価 3,675 円(3,500 円+税) 朝倉書店